オンデマンド授業における学生の取り組みと意識

—ドイツ語科目でのアンケート結果に基づいて—

時田　伊津子

1. はじめに

2020年度から新型コロナウィルスの感染拡大に伴い，多くの大学でオンライン授業が行われてきた。筆者の本務先である日本大学理工学部でも2020年4月に対面授業の代替として，同時双方向型，動画配信＋LMS（オンデマンド形式），LMS単体型のいずれかのメディア授業を行うように要請があった。このうちオンデマンド形式については学部から準備マニュアルが配布され，その利点も説明された。そのため筆者はオンデマンド形式で授業を行ったが，当初どのようにしたら対面授業と同様に学生がドイツ語を習得できるかというのは未知数であった。

また，オンライン授業への移行に伴い，LMS（Learning Management System）の利用も必須とされた。理工学部の初修外国語研究室では，これまで検定試験対策として各言語のe-Learningを導入し，希望者が補助教材として利用できるように整備してきた（中川他2014: 14ff.）。ドイツ語については「e-Learning Deutsch」という文法講座と「独検対策講座」を準備し，検定試験の対策講習会（自由参加）等で導入し，利用を促進している（時田他2016: 3ff.）。筆者の授業クラスでも紹介しているが，これらのe-Learning教材を全員の授業課題とすることはなかった。そのため，本学部の筆者の担当授業において本格的にLMSを導入するのは初めてであった。そのような手探りの状況の中で始まった2020年度であったが，最終的に1年を通してオンデマンド授業を行うこととなった。

本稿では，学生がどのようにドイツ語のオンデマンド授業に取り組んでいたか，また1年間の授業の終了時にどのような意識を持ってこの授業を捉えていたのか明らかにすることを目的とする。筆者が授業作成・実施の過程で認識した利点や問題点と合わせ，オンデマンド授業をめぐる現状を把握し，今後のオンデマンド形式，あるいは対面形式の授業に活用したい。

以下では，まず第2節で実施した授業について概要を述べ，第3節でオンデマンド授業の利点と問題点を教員の立場から指摘した上で，第4節でアンケート調査の結果から学生がどのような意識で，どのように授業に取り組んでいたかを示す。その結果を踏まえ，第5節でまとめを行う。

2. 授業の形式

本節では，調査対象のクラスで実際に行ったオンデマンド授業の概要を提示するため，授業の形式について述べる。

2.1. 授業クラス

今回の調査は，2020年度後期に日本大学理工学部で行った。初修外国語科目は，理工学部で同年度から実施されている新カリキュラムにおいて「教養教育科目」（16単位以上履修）のうち「多文化と社会の理解」（6単位以上履修）という科目群に選択科目として組み込まれた。この科目群では倫理学，歴史学，文学等（半期2単位）に並んで，ドイツ語，フランス語，中国語の3言語の授業が提供され，それぞれ前期にI，後期にIIの科目（各1単位）が開講されている。なお，2年生以上（2019年以前の入学者）には旧カリキュラム[1)]が適用される。1年次には履修しやすいように各学科の時間割に初修外国語の時限が置かれ，各言語の授業が同時開講の形式で設定されている。また学科別のクラス分けが行われている。

調査対象のクラスは，筆者が担当した「ドイツ語II」（後期15回授業）の計4クラスである。この授業は週1コマ（90分）の実施で，前期に引き続き初級レベルの内容を扱う。履修登録者数は計88名で，そのうち1年生が76名，2年生以上が12名であった。前期の「ドイツ語I」から継続して受講する学生が中心となっている。

2.2. 教材と授業，動画の流れ

教材は『ドイツ語の時間〈ときめきミュンヘン〉コミュニカティブ版－マルチメディア－』(清野, 時田, 牛山著。朝日出版社。2016年)を使用した。この教科書では，各課に「私の趣味」，「健康」，「買い物」などテーマが設定され，併せて文法項目を学ぶようになっている。1つの課は次の内容から構成されている：

・1ページ：テーマ導入（キーセンテンス，語や表現の聞き取り）
・2～4ページ：2～3のダイアローグと練習，文法項目の情報
・5ページ：読解テキスト，その他発音のポイント等
・6ページ：文法のまとめ

1回の授業で基本的にダイアローグを1つ扱い，1課を3回の授業で終えている。なお読解テキストは時間の関係で授業では扱わなかった。ドイツ語IIでは，計4つの課（第5～8課）を学び，前半と後半で計2回，復習とまとめを行う授業回を設けた。

オンデマンド授業は次のようなスケジュールで行った。本来の授業日に教員が動画や課題を公開する。学生は小テストをLMSで受験し，授業動画を視聴する。その後LMSに設定した課題と予習に取り組む。小テストと課題には1週間後などの提出期限を設けたが，再視聴ができるように動画には公開期限を設定しなかった。LMSは，CST Portal IIという学部のポータルサイト（以下，ポータルと記載）を利用した[2)]。小テストや課題は選択問題や穴埋め等，自動採点できる形式を中心とし，レポート形式の問題，ノートやプリントアウトを撮影・スキャンし，データを提出する課題も併用した。自動採点以外の課題はLMSで個人へコメントし，授業内でフィードバックを行った。質問はメールで受け付けたが，ノート等を利用した提出課題の空欄やLMSの課題に設定されているコメント欄を用いて質問する学生もいた。

作成した授業動画の内容は以下のような流れとした。学期途中に対面授業に変更になる可能性を考慮し，基本的には教室で行う授業と同様の組み立てとした。はじめに，ポータルサイトで小テストに解答するように指示する。小テストは，前回の授業で新しく学んだ事項を対象とし，範囲を具体的に示している。主に助動詞の人称変化や前置詞の意味等の文法事項，時刻の表現など基本的なレベルの問題である。小テスト後，導入としてドイツについての情報の紹介や簡単な復習，課題の解説などを行う。その後，教科書の内容に入り，各課の初回授業では導入ページも扱う。予習したダイアローグの映像を見てから，内容を解説する。さらに会話文の発音練習を行い，役割練習をする。引き続き，新しい文法項目や学習事項について説明し，重要部分は口頭練習などでも確認する。またその内容を使った会

話練習，筆記による練習を行う。最後に，宿題と予習内容，次回の小テストの範囲を指示する。

宿題は教科書の問題や平易な練習問題で，文法，聞き取り，簡単な作文問題などをポータルサイトに設定した。またやる気のある学生のために，教科書付属の文法問題を提示し，任意で提出させた。予習はダイアローグの内容とし，未知の単語を辞書で確認，主語と動詞など文法情報の記入，和訳を行うこととしている。

オンデマンド授業は対面授業とほぼ同じ進度で進めたが，授業動画が既定の授業時間である 90 分に達することはなかった。学生が練習問題を解く際やノートを取る時間は動画の一時停止をするように指示しているうえ，対面形式では授業中に行う練習問題を一部 LMS に掲載したためである。また学生同士のペア練習やグループ練習を実施できないため，授業動画との対話練習で代用している。

学期末の試験を実施しないことが推奨されたため，成績評価には小テストや宿題の問題，また学期末に行ったまとめの問題より平常点を算出し，活用した。

3. 教員から見たオンデマンド授業の利点と問題点

次に，外国語授業におけるオンデマンド形式の利点と問題点について，作成と実施を行う教員の立場から述べる。

利点としては，授業運営に関わる面が多く挙げられる。第一に，対面授業とは異なり，教室毎の設備に影響を受けずに安定した環境で授業を提供できる。例えば，座席の位置や照明により黒板の板書やスクリーンの見やすさが左右されることはなく，マイクの調子によって音声の聞き取りやすさが変わることもない。音声や映像に不都合があれば，作成時点で修正が可能である。第二に，ポータルサイト（LMS）の使用により，資料の配付や課題の回収が容易である。事前に設定が必要であるが，小テストや課題の採点，得点の記録がある程度自動化できる。第三に，各授業回においてシラバスの進度を確実に維持できる点が挙げられる。対面授業では，教室の使用機器の不調や学生による質問等が長引き，予定する授業内容を終えられないことがある。オンデマンド形式では学生からの質問はメールで受け付けており，授業時間に影響することはない。

一方，教員の立場からオンデマンド授業の問題点を挙げると，主にコミュニケーションに関わる問題，学習内容についての問題，教材作成上の問題に分けられる。以下，詳細について述べる。

第一の問題は，対面でのコミュニケーションの代替となる手段が制限されることに由来する。具体的には，授業中に学生の反応が分からないため，説明を理解しているか，指示した課題に取り組んでいるかなど，受講中の学生の様子が全く伝わってこない。同じオンライン形式でも zoom 等を利用したライブ授業であれば，チャットやアンケート機能を用いて学生の状況を少しでも把握し，理解が十分でないことが分かれば説明を繰り返すなどの対策ができるが，動画授業では不可能である。また，対面授業で机間巡回中に出る質問の数に比べ，メールやポータルサイトで寄せられる質問は大幅に少ない。そのため，学習内容の理解を促進するための対応が十分かどうか把握しにくい。また，学生同士の授業中のコミュニケーションも成り立たない。対面授業であれば，指示内容を理解できない課題について近くの学生に確認を取るような場合でも，オンデマンド授業では不可能である。そのため，中には全く的を射ない解答を提出する学生もいる。

第二に，学習内容については，十分に行うことができない練習があること，成果が一部しか確認できないことが問題点として挙げられる。前者については特に発音練習や役割練習について，正しく発音・作文できているかすぐにフィードバックすることは不可能である。また外国語学習に重要な会話練習，すなわち発話を聞き取り，即座に反応し，それに応じた返答を繰り返すような，話すことと聞くことを連動させた練習も難しい。また学習内容の定着を助けるようなゲーム的要素の練習も導入しづらい。

一部の成果しか確認できないという点については，ポータル（LMS）で指定した課題の結果しか手がかりがないという点に集約される。第一の点に挙げたコミュニケーションの問題とも繋がるが，授業中の筆記練習ができているか，あるいは予習を行っているかは対面授業であれば指名による返答を求めたり，机間巡視で学生の解答を確認したりすることで，ある程度把握できる。しかし，オンライン形式で授業中の練習すべての提出を求めることは現実的ではない。さらに森田／天野（2021: 42f.）でも指摘があるように，LMS を用いた小テストや試験では，資料参照を排した通常の条件下での試験の実施はとりわけ困難である。課題についても，記述式の

文法問題や作文でインターネットの翻訳ソフトやアプリを使用したと思われる解答が散見されることがある。対面授業と比べると，学習成果を判断するには限定的と言わざるを得ない。

第三に，教材作成上の問題として，主に準備に時間と手間が掛かる点が挙げられる。動画作成もポータル（LMS）による課題の作成・採点も，対面授業の準備時間と比べて格段に長時間の作業が必要となる。また LMS 経由で提出課題のフィードバックを行うにも労力が必要である。動画作成には Microsoft PowerPoint を利用し，それぞれのスライドに収録音声を貼り付け，動画を作成した。榎田（2021: 102f.）も「特に語学教育においては，音声の聴き取りやすさに配慮した教材作成が重要」と指摘しているが，初修外国語の教育では綴りの見やすさと音声の聞き取りやすさは必須と考える。そのため音声はマイクを用いて録音し，その後編集作業を行っており[3)]，音声の収録，編集，確認の再生だけでも出来上がる動画の数倍の時間がかかる。

オンデマンド授業を作成する教員の立場からは，以上のような利点と問題点が挙げられる。それに対し，学生はこのオンライン授業や LMS での教材提供をどのように受け止めているのだろうか。また，成果の見えない部分ではどのように授業に取り組んでいるのだろうか。この点について次節で扱う。

4. 学生の取り組みと意識

この節では，アンケート調査の結果をもとに，学生がオンデマンド授業にどのように取り組み，動画での授業や LMS での小テストについてどのように考えているかを提示する。小テストについてのアンケートは 2021 年 1 月，第 14 回授業で行い，授業アンケートは同月，授業最終回である第 15 回に実施した。いずれも授業回のポータルサイトで提示し，LMS 上での回答を依頼した。なお，小テストについてのアンケート結果は 2018 年前期に対面授業で行った「ドイツ語文法 I」（旧カリキュラムの 1 年次対象科目）での調査結果と比較する。

4.1. 小テストアンケート

4.1.1. 小テストについての意識

このアンケートは，毎回の授業で行った小テストの意義を学生がどのように捉えているか，紙形式と比較してポータルサイト（LMS）での実施についてどう考えているか，またポータルでの小テストや課題を解く際の問題点は何かを把握するために行った。履修登録者 88 名中 71 名が回答した。設問を以下に挙げる：

1「毎回の小テストは，学習の役に立ちましたか？」
（選択肢：「はい」，「いいえ」）

2「ポータルで小テストに記入する際，主に何を使っていますか。」
（選択肢：「パソコン」，「スマートフォン」，「タブレット」）

3「外国語授業の小テストは紙形式とポータルのどちらが良いと思いますか。中学校や高校などで受けた外国語の授業も比較の参考にしてください。」
（選択肢：「紙形式」，「ポータル」，「どちらでも良い」）

4「3 のように思った理由は何ですか？」（自由記述）

5「4 に書いたほかに，ポータルでの小テストや練習問題を解く際に，不便だったことや困ったことがあったら教えてください。」（自由記述）

6「もしこの授業が対面授業になって，小テストで解答の手段を選べるとしたら，何を選びますか。」
（選択肢：「紙形式」，「パソコン」，「スマートフォン」）

設問 1 の小テストが学習の役に立ったかという問いに対して「はい」を選択した学生は 70 名，「いいえ」と回答した学生は 1 名であった。上記 3 節でも述べたように，小テストとはいえ，教科書やノートなど資料を参照する可能性を排除できないため前回の要点の復習という位置づけとなるが，役に立つと考える学生が多かった。

設問 2 の小テストで使用する機器については「パソコン」63 名，「タブレット」6 名，「スマートフォン」2 名という結果となり，約 9 割の学生がパソコンを利用していた。なお，2020 年 5 月と 8 月に学部からノートパソコンの貸与が案内されており，スマートフォンの利用は経済上の理由などではなく本人の意思に基づくものと考えられる。

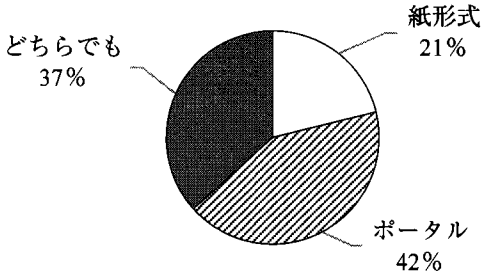

図 1　外国語授業で望ましい小テストの形式（設問 3）

設問 3 の外国語授業で望ましい小テストの形式については，「紙形式」15 名（21%），「ポータル」30 名（42%），「どちらでも良い」26 名（37%）という回答であった。なお，設問 2 の使用機器は設問 3 の回答に特に影響はないと考えられる[4)]。

設問 4 では，設問 3 の回答を選択した理由を尋ねたところ，次のような回答が集まった（複数回答あり；以下同様）。紙形式を選択した 15 名では，「手で書く方が覚えられる」という学習手段としての利点を挙げる回答が 3 分の 2 を占め，他に「ポータルではドイツ語特有の文字などの入力が大変」，「ネット接続のトラブルを回避できる」，「LMS の操作が手間」という利便性が挙がった。

一方，ポータル形式を選択した 30 名では，手間や時間の節約についての回答が最も多かった。オンライン授業で紙の解答用紙を提出する場合の手順は，課題をプリントアウトしてそれに書き込み，スキャンをしてデータを提出というように複雑であり，それを念頭に置いた回答と考えられる。また結果の管理の容易さ，採点の正確さについてのコメントも見られた。また「選択肢の問題ではスペルミスがない」と解答形式に言及した学生や，制限時間があるため小テストとしての形式が保てる部分に注目した学生もいた。ほかに，ポータル形式にすでに慣れていることや外出中にも回答が可能という手軽さを指摘した意見があった。これらはいずれも利便性に関する視点である。それに加えて，ポータルでの解答をパソコンでドイツ語を打ち込む練習として捉えた学生や「選択肢があるとじっくり考えるので，覚えることに繋がる」という理由を述べた学生もいた。環境・経済的な観

点から紙の無駄が避けられるという回答も見られた。

どちらでも良いと回答した26名の中には「パソコンでは入力の練習になり，紙形式では綴りの確認になる」など両方それぞれ良いという意見や「どちらでも良いが，文章を書くなら紙形式」などのニュアンスを示す学生もいた。表1にそれぞれの回答をまとめて示す。

設問5の問い，ポータルで小テストや練習問題を解く際に不便だったことや困ったことについては21名が回答した。「小テストの時間が短い」(13名)，「インターネット回線やポータル，パソコンの不調」(6名)，「文字の入力」(4名）が挙げられた。ポータルでの練習問題には制限時間を設けなかったが，小テストには設定した。対面授業であれば学生の反応を見ながら時間の調整も可能であるが，LMSでは不可能なため，学生にとって適切な時間設定をできないことがあったと考えられる。またドイツ語の特殊文字（ウムラウト，エスツェット）の入力方法については説明文書を授業教材として提供しているが，ドイツ語キーボードを設定しない学生にとっては特に面倒だったようだ。なお，これらの点について2021年度に

表1　望ましい形式を選択した理由（設問4）

望ましい形式	選択した理由
紙形式	手で書く方が覚えられる（10名） ポータルでは文字の入力が大変（2名） ネット接続のトラブルを回避できる（2名） LMSの操作が手間（1名）
ポータル形式	手間が掛からない（10名） 結果の確認が容易（5名） 選択肢の問題でスペルミスがない（4名） 紙の無駄が避けられる（4名） 時間の節約になる（3名） 書いた文字より採点が正確（3名） 制限時間がある（3名） 慣れている（2名） パソコンの練習になる（2名） 外出中にも回答が可能（1名） 選択肢があると覚えることに繋がる（1名）
どちらでも良い	両方それぞれ良い（9名） どちらも差がない，どちらも問題ない（7名） 文章を書くなら紙形式，等（3名）

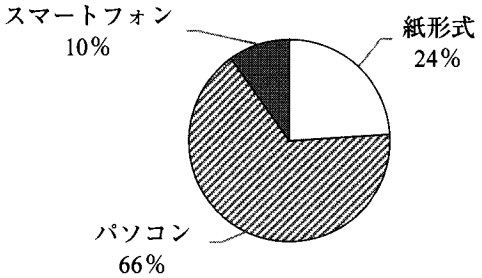

図 2　対面授業になった場合の回答手段（設問 6）

は小テストの制限時間を延長し，文字入力の頻度を減らし選択問題を増やす等の対策を行った。

設問 6，この授業が対面授業になった場合の小テストでの解答手段を尋ねた質問に対しては，「紙形式」を希望する学生が 17 名（24%），「パソコンを使ってポータル」を選択した学生が 47 名（66%），「スマートフォンを使ってポータル」と回答した学生が 7 名（10%）であった。設問 3 と比べると紙形式を選んだ学生の割合はあまり変わらず，ポータルが良い，あるいはどちらでも良いと回答した学生は，多くがパソコンを選択したと推測される。

4.1.2.　アンケート結果の比較

ここで，小テストの形式の希望とその理由について尋ねた設問 3，設問 4 の回答結果を，2018 年度前期，旧カリキュラムの「ドイツ語文法 I」の対面授業で行った同様のアンケート結果と比較する。このクラスでは第 2 ～ 4 回授業で紙形式による小テストを行い，第 5 回授業（5 月 17 日）にポータルを利用した小テストを一度実施した。この小テストは定冠詞の格変化を問う問題で，スマートフォンを用いて解答するよう指示した。入力の手間を考慮して選択問題とし，ポータルの利用ができない場合は紙形式での解答も可能とした。その結果，ポータルを利用した学生が 50 名，紙形式を利用した学生が 11 名であった。その翌週，第 6 回授業（5 月 24 日）に「小テストは紙とポータルのどちらがよいか。あるいはどちらでもよいか」というアンケートを実施した。その結果，「紙形式」を選択した学生が 27

名（47%),「ポータル」を選択した学生が 16 名（28%),「どちらでも良い」と回答した学生が 15 名（26%）（回答数計 58 名）であった。

その形式を選択した理由（複数回答可能）は次の通りである。「紙形式」では「紙の書きやすさ」あるいは「ポータルでは打ち間違える」というように記入や操作について言及した回答があった。ポータル利用の際には手間や時間が掛かるという指摘や，ポータルサイトの見づらさ，通信環境の不十分さも挙げられた。このように，ポータルと比較して紙形式の利便性についての回答が多かった。さらに，紙に書いた方が覚えやすい，書く方がアウトプットに効果があると思う，など学習効果についてのコメントも見られた。「紙形式の方がテスト感がある」という意見や「選択肢があると答えを思い出してしまう」,「携帯電話ではカンニングしやすい」との回答もあった。

「ポータル」を選択した理由には，まず手軽さや時間がかからないとい

表 2　望ましい形式を選択した理由（2018 年前期）

望ましい形式	選択した理由
紙形式	記入しやすさ・ポータルの操作の間違い（5 名） 手間がかからない（5 名） ポータルでは時間が掛かる（4 名） ポータルが見づらい（4 名） 書いた方が覚える（4 名） 紙の方が効果がある等，学習効果（3 名） 通信環境（2 名） テスト感がある（2 名） 選択肢があると思いだしてしまう（1 名） 携帯電話ではカンニングしやすい（1 名）
ポータル形式	手軽・書く必要がない（5 名） 採点が自動・早い・確実（4 名） 選択問題が良い（3 名） 時間の効率が良い（2 名） ポータルで問題ない（1 名） 紙形式では書いている途中に忘れる（1 名）
どちらでも良い	それぞれの良さ・マイナス面（2 名） こだわりはない（2 名） やることに意味がある（1 名） 結果は変わらない（1 名）

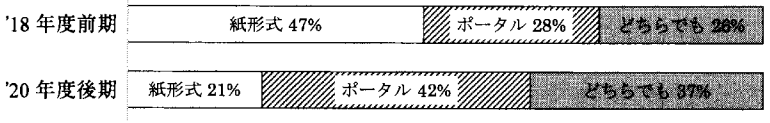

図 3　望ましい小テスト形式の比較

う便利さが挙がった。紙での小テスト後は正解を提示して学生同士で交換して採点，それを提出させて教員が確認するという手順を取っており，それを踏まえてポータルでの採点の早さや確実さを理由とした学生もいた。記入ではなく選択形式の設問が良いという声も聞かれた。

「どちらでも良い」という学生ではそれぞれの良さ・マイナス面を指摘した回答や「やることに意味がある」，「結果は変わらない」とする意見があった。

紙形式を選んだ理由にもポータルを選んだ理由にも「紙形式・ポータルの方が手間や時間が掛からない」という言及があった。回答者がスマートフォンでの操作に慣れているかという点に，回答の選択が左右される部分もあったと考えられる。表 2（11 ページ）に選択の理由をまとめて示す。

2018 年前期の調査と 2020 年度後期の調査の結果を比べると図 3 のようになる。2018 度前期の調査では，紙形式を選択した学生が約半数であったのに対し，2020 年度後期では 2 割程度であった。それに対し，ポータルを選択した学生は約 3 割から約 4 割に増えている。前者の調査はポータルの小テストを 1 回行った後に実施したのに対し，後者の調査対象者は 1 年を通してポータル形式のみで受験したため，ポータルの利用に慣れていることも影響しているだろう。表 1（9 ページ）と表 2 にまとめたように，紙形式を選択した学生の理由は，2018 年前期ではポータルの使いづらさを指摘する回答が多かったが，2020 年度後期では数が限られていた。これには利用した機器の影響も考えられる。前者ではスマートフォンの小さな画面で小テストに解答したのに対して，後者では設問 2 で回答があったように大部分の学生がパソコンを用いている。大きな画面で受験することにより，LMS の使用感が向上したと推測される。その可能性は，設問 6 でスマートフォンを選択した学生は 1 割にしか満たなかった点にも表れている。とはいえ，2020 年後期でも，紙形式を選択した理由としてポータル

での文字入力やパソコンの接続状況を挙げる学生もおり，LMS のユーザーインターフェイスの改善や通信状況については今後も配慮が必要である。

また，いずれの調査でも紙形式を選択した理由として「書いた方が覚えられる」という学習効果を挙げる学生が一定数見られた。語彙を記憶する方略のひとつに，何度も書くことによって覚える「身体化」があるが（竹内 2003: 186ff.），これまでの外国語学習等でこの方略を有効と感じた学生が紙形式を希望したと考えられる。

この 4.1 節では，アンケートの結果を通じて，ポータルを用いた小テストについて学生がどのような意識を持っているかを探った。その結果，対面授業とは異なる形式でも小テストは学習の役に立つと認識していること，主にパソコンを用いて小テストに解答していることが分かった。また，2018 年度と比べ，望ましい小テストの形式としてポータルあるいはどちらでもよいと回答した学生が増加しており，ポータルの操作に慣れていると考えられる。対面授業でもパソコンの利用を希望する学生が多いが，ポータルでの小テスト実施では制限時間や回線・機器の不調，文字入力など，配慮すべき点もある。一方，書くことで覚えるという方略を身につけている学生は紙形式を希望していることも明らかになった。

4.2. 授業アンケート

このアンケートは，学生がオンデマンド授業について利点と問題点をどのように捉えているかを調査し，あわせてオンデマンド授業にどのように取り組んでいるのか明らかにするために実施した。履修登録者 88 名中 69 名が回答した。設問は以下のとおりである。なお，設問 1 ～ 4 では 4 段階の選択肢を提示した。内容は「大部分見た・した」，「半分以上見た・した」，「あまり見なかった・しなかった」，「ほとんど見なかった・しなかった」である。設問 5 ～ 7 は自由記述とした。

1「授業動画を見ましたか。」（選択）
2「授業動画での発音練習や役割練習などの口頭練習はしましたか。」（選択）
3「Dialog の予習（和訳，文法）はしましたか。」（選択）
4「動画を一時停止してノートに書いてみる問題は解答しましたか。」（選択）

5「このドイツ語（I &）II の授業で，良かった点があれば教えてください。」（自由記述）
6「このドイツ語（I &）II の授業で，改善したら良い点があれば教えてください。」（自由記述）
7「このドイツ語（I &）II の授業で，ドイツ語の学力やモチベーションの向上のために，希望することがあれば教えてください。◎ドイツ人と会話をしたい，など動画授業では実現が難しいことでも構いません。」（自由記述）

4.2.1. 授業での取り組み状況

まず，授業での取り組み状況を問う設問 1 ～ 4 の回答結果を次ページの図 4 に示す。

設問 1 の動画については，8 割以上の学生が大部分視聴したと回答している。視聴を授業の受講と考えると，この点では対面授業とほぼ同様に参加していたと思われる。

設問 2 の発音練習は主に教員の発音や教科書の音声の後について真似して発音する練習，あるいは一時停止して自分で発音を確認する練習で，役割練習はダイアローグの役割を分担したり，質問に対して自分で文を作って答えたりする練習である。回答では「大部分」，「半分以上練習した」という学生が 7 ～ 8 割であった。多くの学生が比較的きちんと取り組んでいる。しかし，対面授業では基本的にすべての学生が常に行う内容であり，2 割以上の学生が「あまり」，「ほとんど練習しない」という状況は考えにくい。以下の設問 6 の回答でも言及があったが，オンデマンド授業では机間巡回の際に教員が指導したり，クラスメイトと一緒に練習したりする機会がない点が影響を及ぼしていると考えられる。

設問 3 のダイアローグの予習は，設問 1 から 4 の項目の中で最も取り組む度合いが低かった。対面授業でも予習を忘れる学生はいるが，ペアワークでの内容確認や指名による発表などを行うため，予習をしない学生は多くないと思われる。オンデマンド形式の場合，教員側が学生の予習内容を確認する手段がなく，おろそかになりがちと推測される。

設問 4 の「一時停止をしてノートに書く問題への解答」は，授業動画を視聴している間の学習活動として，設問 2 の発音・役割練習より個人での

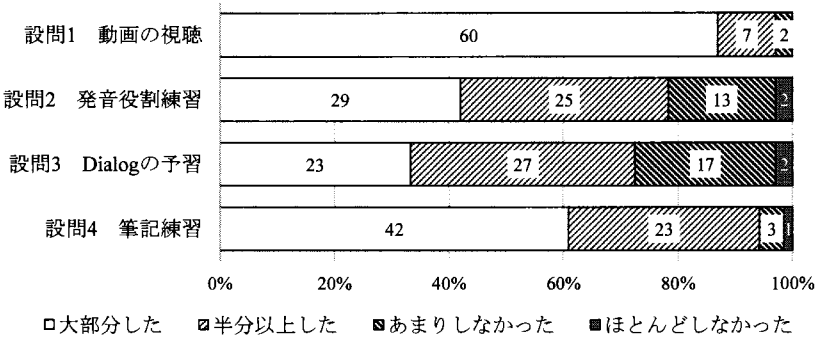

図 4　オンデマンド授業での取り組み状況

作業が時間的に長く掛かる。それにもかかわらず「大部分」,「半分以上行った」という回答が合わせて 9 割以上であった。ノートテイクのタイミングと一致する等のきっかけがあるかもしれないが，筆記の練習が学習内容を理解するためには重要な手段の一つであると理解していることが窺える。

4.2.2.　オンデマンド授業への意識

次に，設問 5 ～ 7 についての回答を示す。ここでは，授業の良かった点，改善できる点，授業への希望を自由記述（複数回答可）の形式で尋ねることで，オンデマンドの授業形式で学生がどのような点に注目しているかを探る。以下では，設問毎にオンデマンド授業に関連する回答と，それ以外の授業内容に関わる回答を分けて提示する。

設問 5，この授業で良かった点についての質問には，33 名の学生が回答した。このうちオンデマンド形式に関連する回答を見ると「音声・発音の聞き取りやすさ」(5 名),「動画・スライドの見やすさ」(5 名）という音質と映像についての言及が多く挙がった。さらに，オンラインのライブ形式でなく授業動画を公開することで「分からない部分は動画を繰り返し確認できた，見直しして復習できた」(5 名),「自分のペースで一時停止しながら学習できた」(3 名）という学生もいたようだ。吉満（2021: 254）にも指摘があるように，オンデマンド形式では対面授業と異なり教員やクラスメイトにその場ですぐに質問ができないが，不明な点を理解するために

繰り返して視聴する形で補っていると考えられる。「自分の時間の取れるときにできる」,「リアルタイムの授業がなかった」(各1名)という回答もオンデマンドの特徴についての言及である。また「授業動画の長さが丁度よく，ノートも授業時間内に取ることができた」,「講義時間90分を超えることがなく，小テストや練習との時間配分が良い」(各1名)という時間や課題の量についての回答も見られた。ポータルサイト(LMS)に関連したものでは「小テストや課題がやりやすかった」,「文法の練習問題があるのが良かった」(各1名)という記載もあった。さらに「対面授業よりも苦戦することがあったが，自分から調べるようになった」(1名)と回答した学生もいた。

なお，オンデマンド授業に限らず授業内容で良かった点として「授業・解説などのわかりやすさ」(7名),「前回授業の復習, 復習回の設定」(3名),「ドイツ関連情報の提供」(4名),「内容の多様さ」,「進め方・固定した授業の流れ」,「英語との類似やその言及」(各2名),「重要事項の暗記の方法」,「練習問題や小テストの解説」,「教科書中心の授業であること」,「追加教材の歌」(各1名)が挙げられた。

設問6の問い，この授業の改善点については16名から回答があった。オンデマンド授業形式に関連するものは，ポータルサイト(LMS)についての回答が最も多く「小テストの制限時間を延長して欲しかった」(5名),「動画へのリンクが分かりにくかった，授業ごとにリンクを張って欲しかった」(3名),「記述式課題の個人へのフィードバックが欲しかった」(1名)との指摘があった。また，発音や会話について「発音が身につかなかった」,「発音の間違いに気づきにくい」,「ドイツ語でコミュニケーションを取る場面がなかった」(各1名)という意見が聞かれた。さらにオンデマンド授業の進め方として「教員が同時的に板書しながらの授業」の希望(1名)もあった。なお，2021年度は液晶タブレットを用い，部分的だがPowerPointのスライドに書き込みながら解説するスタイルも導入している。また，授業形式として「オンラインでの双方向授業」(各1名)を望む声も聞かれた。

なお，オンデマンド形式にかかわらず，授業内容としては「例文をもっと多く紹介して欲しかった」,「文法が多かったのでもっと会話などを取り入れて欲しかった」(各1名)という記述があった。

設問7のこの授業でドイツ語の学力やモチベーションの向上のために希望することに関しては13名が回答した。オンデマンド授業で実現が制限される内容では「一度でも・月に一回でもいいので対面授業を受けたかった」(2名)という授業形式についての記述があった。「ドイツ人と会話」,「ドイツ語のみの授業」,「ドイツ語の言葉遊びのようなゲーム」(各1名)というようにドイツ語を生かした実践的な学習活動を希望する学生もいた。

その他授業内容について「日常で使われるようなラフな会話を聞いてみたい」,「ドイツ語と英語の意味やスペルが一緒のものを紹介」,「ドイツ語をもっと身近に感じられる授業」(各1名,以下同様)という希望もあった。授業外の学習については「自主学習を促進させるため加点される課題の増加」,「将来ドイツに留学したいので独作文の添削等」を望む記述があった。またドイツの文化との接点として「ドイツで有名な歌や音楽を聴きたい」,「ドイツの食べ物を食べてみたい」,「旅行に行きたい」という希望も挙げられた。表3に,オンデマンド形式に関連する解答をまとめて示す。

この4.2では,授業アンケートの結果に基づき,オンデマンド授業に学生がどのように取り組み,どのような意識を持っているのかを明らかにし

表3 授業で良かった点,改善できる点,希望する点(設問5～7)
(オンデマンド形式関連を抜粋)

良かった点	音質と映像(聞き取りやすさ,動画の見やすさ) 授業動画の公開(動画の見直しが可能,自分のペースでの学習が可能,時間の取れる時に受講可能,リアルタイム授業がない) 時間の長さ(授業動画の長さ,課題との時間配分) ポータルサイト(課題のやりやすさ,文法練習) 自分で調べる習慣が付いた
改善できる点	ポータルサイト(小テストの制限時間,動画リンクのわかりにくさ,記述式課題のフィードバック) 発音や会話(発音が身につかない,間違いに気づきにくい,会話がしたい) 授業の進め方(板書と同時進行を希望) 授業形式(双方向授業の希望)
希望する点	授業形式(対面授業の希望) ドイツ語会話の実践(ドイツ人との会話,ドイツ語での授業,言葉遊びなどのゲーム)

た。設問1～4では授業での取り組みの状況について尋ねたが，この設問で対象としたのは，提出することにより教員が達成度を確認する課題ではなく，授業の視聴や授業中の練習など学生の自律的な学習の部分である。アンケートの結果，受講の大前提である動画の視聴と，授業内容の理解のために積極的な姿勢が必要となる筆記練習には比較的真摯に取り組んでいることが明らかになった。一方，発音練習，役割練習や予習についてはさらに取り組みを促進するような対策が必要であると考えられる。

設問5～7の回答にもとづくと，オンデマンド授業に関して主に次のような点に学生の意識が向けられていることが明らかになった。第一に，動画授業については動画の音声，スライド，時間が適切であるか，内容が分かりやすく復習の設定があるか，発音･会話練習が十分かという点である。第二に，LMSについては課題の制限時間の適切さ，リンクの分かりやすさ，練習問題（の量）が適切であること・やりやすいことが問われている。第三に，オンデマンド形式については動画の繰り返しの視聴や一時停止など利点を生かした学習がなされている一方，対面授業の実施や，オンデマンド授業では困難な発音指導や会話の実践についての希望もあった。

5. まとめと展望

4節では学生の視点から見た小テストやオンデマンド授業に関する意識，授業への取り組みの様子を示したが，3節で挙げた教員側から見たオンデマンド授業の利点，問題点と合わせて考えると，外国語授業においては，学習内容によってオンデマンド形式との相性に大きな差があることが改めて明らかになった。2節で示した授業動画の内容に沿って考えると，導入のドイツについての情報提供や，課題の解説はオンデマンド形式で支障がない。語や表現の聞き取り練習やダイアローグの解説，文法項目や学習事項の説明も動画を用いた授業である程度学習できているようだ。それに対して，ダイアローグの予習の確認や各学生の解答に対する細やかな対応はオンデマンド形式では困難である。さらに発音練習に対する瞬時のフィードバック，臨場感のある役割練習や学習内容の実践となる会話練習も不可能だ。また，小テストは選択式であればLMSで十分であるが，記入式の問題であれば紙の方が解答しやすいようだ。

本学部では，2021年度もオンライン授業が一部継続しており，初修外

国語科目もその対象となっている。4節で提示した改善できる点や学生の希望にはなるべく対応してきたが，とりわけ発音練習や役割練習，会話練習など同時的なコミュニケーションと不可分な練習を十分行えるような根本的対策はできていない。これらの点を考慮すると，ドイツ語など初修外国語の授業はオンデマンド形式のみで行うより，部分的にでも対面授業，あるいはzoom等を利用したオンラインによる同時双方向型授業を取り入れ，発音や会話練習を行ったり，授業内容の理解度を確認し，質問を受け付けたりする時間を設ける方が望ましいと考えられる。

今後も対面授業だけでなく，オンデマンド授業や同時双方向型のオンライン授業が行われる可能性は高いと思われる。対面方式と全く同様の授業をオンラインで行うことはできないが，すでに見たようにオンデマンド方式授業の利点も多くある。同時双方向型でも同様であろう。このような利点を活かし，さらにLMSの整備や教員同士の情報交換，学生からのフィードバックの活用などを行うことは，より良いオンライン授業の実現に繋がるのではないだろうか。

注

1) 旧カリキュラムでは外国語科目（10単位以上履修必須）のうち初修外国語が4単位まで認定された。設置科目はドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語（2018年度まで）の初級I, II, 文法I, II, 中級I, II（各1単位）であった。
2) CST Portal IIは，富士通の教育基盤システムである「CoursePower」を利用したシステムである。
3) 音声録音編集ソフトにはAdobe Auditionを利用し，音量の調整やノイズの削除等も行った。
4) パソコン以外を利用する学生8名の回答は,「紙形式」1名,「ポータル」4名,「どちらでも良い」3名であった。

参考文献

岩崎克己（2010）:『日本のドイツ語教育とCALLその多様性と可能性』三修社.
榎田一路（2021）:「第5章　非同期型オンライン授業のための音声・動画教材の作成」In: 森田光宏／榎田一路編著『コロナ禍の言語教育—広島大学外国語

教育研究センターによるオンライン授業の実践—』溪水社. 102-128.
竹内理（2003）:『より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究』松柏社.
時田伊津子／中川浩／周一川／郭海燕／柳武司／石部尚登／道川典子（2016）:「初修外国語教育における検定試験の対策支援」In:『日本大学理工学部一般教育教室彙報』第 101 号. 11-20.
中川浩／周一川／郭海燕／柳武司／時田伊津子／石部尚登／道川典子（2014）:「日本大学理工学部のカリキュラム改訂に伴う初修外国語研究室の対応とその成果」In:『日本大学理工学部一般教育教室彙報』第 97 号. 11-19.
森田光宏／天野修一（2021）:「第 2 章 オンライン授業における単位修得条件と成績評価の工夫—基本的な考え方と 2020 年度前期の実践例—」In: 森田光宏／榎田一路編著『コロナ禍の言語教育—広島大学外国語教育研究センターによるオンライン授業の実践—』溪水社. 29-54.
吉田晴世／松田憲／上村隆一／野澤和典編著（2008）:『ICT を活用した外国語教育』東京電機大学出版局.
吉満たか子（2021）:「第 10 章 ドイツ語の非同期型オンライン授業における教材ビデオ—その作成と受容—」In: 森田光宏／榎田一路編著『コロナ禍の言語教育—広島大学外国語教育研究センターによるオンライン授業の実践—』溪水社. 228-266.